

## 9月11日（月）その68 大記録の壁を破った男・桐生祥秀

過ぎた土日は、疲れを取るためにゆっくりと体を休めることを心がけた。読書をしたり新聞をゆっくり読んだりテレビを見たりして過ごした。その中で私の心の琴線に触れたことが三つあった。

一つは桐生祥秀（よしひで）選手の9秒の壁の突破、二つめは県立博物館・美術館まで出かけて見てきた「ウィルソン展」、三つ目はテレビ番組で、昨日の夜9時からやっていたNHKスペシャル「スcoop・沖縄と核」です。いっぺんに三つの話を5分以内で語る自信はないので、今日は、桐生祥秀についてお話をします。他の二つは、後日お話をします。

9日に福井県で行われた日本学生対校選手権男子100M決勝で桐生祥秀選手が9.98秒で優勝し、日本人初の9秒台の記録が生まれた。

これまで日本人は伊藤浩司10秒00、朝原宣浩10秒02、末続慎吾が10秒03と好記録を出しながら、誰も「10秒の壁」を突き破ることができなかった。

桐生は4年前京都洛南高3年の時に10秒01を出し、「9秒台に一番近い男」となった。しかし大学生になって、10秒01を破ることができなかった。その間に日本の短距離男子は、次々にニューヒーローが飛び出してきた。山形亮太（10秒03）、サニブラウン・ハキーム（10秒05）、多田修平（10秒07）、ケンブリッジ飛鳥（10秒08）らである。

桐生は6月の日本選手権は4位。ロンドンでの世界陸上2017の100M日本代表に選ばれなかった。かろうじてリレーメンバーには選ばれて力走した（3位・銅）が、会場で100mのレースを観戦するという屈辱を味わった。

今回は特に注目を集める大会でもなく、足の不調もあり本人の状態も完璧ではなかったようである。その分、逆に肩の力が抜けてのびのびと走れたのかも知れない。追い風1.8mと絶好のコンディションで、神様も味方した。

人類は長い間100M10秒の壁を破ることができなかったが、1968年のメキシコオリンピックでジム・ハインズ（米）が9秒95を記録して、初めて「10秒の壁」を突破すると、セキを切ったように続々と多くの選手が10秒の壁を破るようになった。この50年で100人を超えた。桐生祥秀は、世界で126人目であるらしい。しかし9秒台の選手はほとんどがアフリカにルーツをもつ選手である。白人ではクリストフ・ルメートル（フランス）9秒97、蘇炳添（スービンチャン・中国）9秒99などアフリカ系以外は数人しかいないようである。すごい、記録だ！

ウサイン・ボルト（ジャマイカ）の世界記録9秒58にはまだ遠い。しかし「10秒0」台で有力選手が競い合う日本の男子短距離陣。桐生が壁を破ったことで、今後9秒台の選手がもっと出てくるような気がする。

世界的に見るとボルト以外では、ヨハン・ブレイク（ジャマイカ）9秒69、タイソン・ゲイ9秒69、アサファ・パウエル9秒72、ジャスティン・ガトリン9秒74らが続く。ちなみにボルトと2位の選手との差は1.14m、ボルトと桐生祥秀との差は4.02mであるらしい。

桐生は「やっと世界のスタートラインに立てた。このタイムに甘えることなく練習していきます。」とインタビューに答えていたが、9秒台をオリンピックの予選で出して、ファイナリストになれなかった者はいない。桐生だけではなく、日本の有望選手の切磋琢磨に期待したい。

## 9月12日（火） その69 70年前も、50年前も、今も沖縄は「捨て石」

私が物心ついた頃には、沖縄はアメリカの施政権下にあった。渡名喜村には入砂島という無人島があり、アメリカ軍の射爆場として使われていた。

しかし中3まで島でのんびりと育ったので、「復帰運動の大きなうねり」も、「コザ暴動」も、少し遠い世界のような気がしていた。

10日（日）NHK 特集「スクープドキュメント・沖縄と核」という番組を見た。「離島だから知らなかった」ではなくて、「沖縄中の住民が知らなかった」ことに衝撃を受けた。当時の兵士ロバート・オハネソン（74才）は次のように証言していた。「私たちは核戦争の準備をしていた。1967年沖縄には1300発の核が配備されていた。広島70倍の威力のあるものだった。核の集中する沖縄をソ連が攻撃しないはずはない。私は韓国に核を運んだとき、もう沖縄に戻ることはできない。沖縄は壊滅すると思っていた。残してきた家族にももう会えないと覚悟を決めていた。」と証言していた。

アメリカが沖縄に核が存在したことを認めたのは2015年である。核があるとの噂はあったが、その実態は一切国民には知らされていなかった。その後50年経って公文書が開示され、ようやく関係者が証言を始めた。

ロバート・レプキー氏（81）は、次のように証言した。「1959年沖縄にはナイキ・ハーキュリーズという核が8カ所に配備されていた。現在的那覇空港の所にあった基地で、突然すさまじい轟音とともにナイキに点火され、地上と水平に飛び海に突っ込んだ。1959年6月19日のことだ。1人の兵士の誤操作でナイキに点火され、彼は即死した。核弾頭を搭載しており、広島と同じ20キロトン爆弾だった。幸い核爆発は起きなかったが、核の事故は徹底的に隠蔽された。もし爆発が起きていたら那覇は吹っ飛んだだろう。」

1960年の安保闘争は、右翼も左翼も巻き込んで大きな闘争になった。国会の周りを30万人（主催者発表）の人が取り囲む中、日米安全保障条約の延長は国会で強行採決された。当時の岸内閣は、混乱の責任をとり総辞職した。その条約で、「アメリカは日本に核を持ち込まない」とした。しかし「日本に沖縄は含まれない。沖縄の基地には日本政府は関与しない。」と秘密裏に確認されていたのである。沖縄の住民は何も知らずに、全世界を破壊できるほどの大量の核と隣り合わせで生きてきた。しかも整備担当の兵士が「沖縄は壊滅する」と言うほど、一発即発の状態だったのである。

1969年沖縄では米軍に対する怒りが頂点に達し、復帰運動は県民総ぐるみの運動となっていた。「もうこれ以上住民を押さえ込むことはできない」として、アメリカ・ニクソン大統領は沖縄の返還を約束した。しかし核の撤去に関しては日本政府と密約が交わされていた。「緊急時には、再び沖縄に核を持ち込む。」との内容であった。それを裏付けるように、嘉手納弾薬庫は空のまま、今でも維持管理されているとして、番組は終了した。

復帰前「沖縄には核が配備されている」と噂はあったが、どのような実態だったのか、沖縄県民には何一つ知らされていなかった。ソ連や中国との核戦争で沖縄が消滅するかもしれないことを両政府は黙認していたのである。

沖縄戦で沖縄が本土防衛の「捨て石」とされた。そして驚くべきことに1960年代も核が配備され、「捨て石」とされた。日本の米軍基地の71%が集中し、県外に移設できない現状から、沖縄は今も「捨て石」なのである。

## 9月15日（金） その70 ウィルソンが写した100年前の鮮明な写真

大学生の頃「野歩路（のぼろ）の会」というサークルに属していた。キャンプやソフト山登りを楽しむサークルだ。私は、昔「カニ族」だったのだ。GパンにTシャツ姿で茶黄色のでっかいリュックを背負いテントやシュラフも持ってキャンプをするのである。西表島横断や北部の山々の縦断などもやったし、離島キャンプ、屋久島の山登り、北海道への長期旅行（ユースホテル宿泊）などもやった。屋久島には樹齢 1000 年を超える自然の杉が多くある。弥生杉や縄文杉が有名だ。古い時代に切り倒されたでっかい杉の木の根元が残っていて、「ウィルソン株」と呼ばれていた。

ちょっと前から新聞にウィルソンという人が 100 年前に写した沖縄の写真が掲載されていて、私は大変興味深く読んでいた。その人と「ウィルソン株」のウィルソンが同一人物だと知って、さらに興味が湧いてきた。先日、テレビのニュースを見て、沖縄県立博物館で「ウィルソン展」が開催されていることを知り、過ぎた日曜日の朝一番に見に行った。

アーネスト・ヘンリー・ウィルソンはイギリス人である。彼はプラントハンターであった。新種の植物の種を求めて中国や日本などのアジアの奥地を探検していた。1914 年日本にやってきたウィルソンは、屋久島や北海道、サハリンなどを探検した。そして 1917 年にも再び来日し、沖縄本島や慶良間などを訪問している。彼は「丘の上、墓に覆われた傾斜地、道路脇といった沖縄のあらゆるところで、印象的な姿をしたマツを見た。これほど素晴らしい景観の島をかつて訪れたことがない」と記録している。

ウィルソンは当時の最新鋭のフィールドカメラ（野外用のカメラ）を持っていた。ガラス乾板と呼ばれるもので写し取られる写真は、鮮明で美しい。それ以前の探検家はスケッチをしていたが、ウィルソンはカメラの持つ新しい可能性にいち早く気づいていた。ありのままの姿で 100 年先まで伝えることができると思った。何度も被写体の周囲を歩き、最高の構図と光の具合を考えた。ウィルソンは人物もたくさん写しているが、当時のカメラは 5～6 分じっとしてはならず、写される人は大変だったようである。

博物館で一つ一つの巨大な写真をじっくりと見させてもらった。「100 年前の写真がこんなに鮮明なのか？」と思うくらい、隅々まで美しい写真である。構図が素晴らしく、写した人の意図やメッセージが伝わってくる。彼は「写真や標本で記録を残さなかったら、100 年後にはその多くが消えてなくなっているであろう」と述べている。10 月 15 日までの長期間やっているようなので、もし機会があれば見に行ったら？（入場料 600 円）

これらの写真はハーバード大学に眠っていたのを屋久島在住の古居智子氏が発見したものである。ウィルソンを研究していた彼女は、アメリカで英語で書かれた文献を捜しまわり、今回の大発見に至ったのである。さらに彼女は沖縄の研究者の協力を得て、その写真が写された場所を特定し、100 年前との比較研究をしている。地道な粘り強い研究に頭が下がる思いである。彼女のおかげでこんなに鮮明な 100 年前の写真を見ることができて「感謝！感謝！」である。植物は人間の暮らしとともにあったのだ、大変感動した。ウィルソンの写真に写った大木のうち 2 本だけが現存しているという。近いうちに、100 年の嵐をくぐり抜けたその大木を見に行きたいと思っている。